スペイン語語彙におけるアラビズム

三好準之助

I 序　文

I. 1. 本稿の目的

ロマンス諸語のなかでそれぞれの言語を特徴付けるもの、というとき、スペイン語の場合にはその語彙のなかに占めるアラビア語系要素（アラビズム）の挙げられることが多い。[2] そしてまたこの要素の特徴もさまざまな観点から指摘されている。そして我われはこれらの指摘を考慮しつつ、スペイン語の語彙のアラビア語的性格についての、一種の常識を持つに至っている。

他方、日常スペイン語を構成している語彙については、その累積使用率にもとづいて計算してみると、上位 2,000 語が延べ語数の 90％以上を占めているという結果が出されている（調査対象や語の認定の仕方によってズレが出ることは否定できないが）。[3] であれば、基礎語彙 5,000 語[4]をもってすれば、ほぼ日常スペイン語をカヴァーすることができよう。

そこで筆者は、スペイン語語彙の全体を研究対象として指摘されてきた諸特徴が、ほぼ日常語語彙の全体を網羅する基礎 5,000 語においてはどこまで有効であるかを検討してみることにした。

I. 2. スペイン語語彙のなかのアラビア語系要素の特徴として挙げられてきたもののなかで本稿が検討の対象とするのは以下の諸点である：

① 総語彙のなかに占める割合 … 8％。[5]

② 意味の点では、感情・善悪などの抽象概念を表わすものが少ない。[6]

③ アラビア語系語はほとんど新たな事物や概念と共にスペイン語に移入した。[7]

ほかにもいくつかの特徴が指摘されているようであるが、本稿ではとりあえず以上の 3 点を中心に検討をすすめることにする。[8]

I. 3. 検討対象のアラビズム

a. 基本語彙とされた現代スペイン語のなかから、Corominas を中心にして入手することができた語源考証を手掛りにしてアラビズムを選びだした。本稿で利用される語源関係のデータは、特に注記のない場合は Corominas のものである。[9]

b. 検討の中心はアラビズムの移入時におけるスペイン語 (castellano) とのかかわり方である。移入そのものの時期としては最盛期が 10 世紀で、中世後期には消えてゆくものも出てくる。[10]

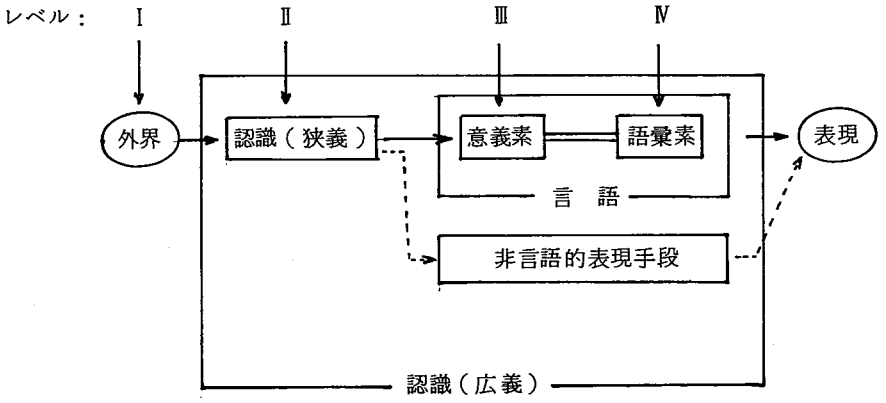
c. 移入経路としては、（方言も含めた）アラビア語から直接スペイン語に移入したものを対象にする。[11] だから例えば、周知の如くアラビズムを介してヨーロッパに入った概念である cero「ゼロ」も、スペイン語の場合にはイタリア語を経由しているので、本稿の検討の対象からは外れることになる。

II. アラビズム移入のレベル

本稿の I. 2. ③. を I. 3. b. などとの関連で検討するためには、移入の機構を異文化接触の範囲で

（ゆえに意味論を越えて）分析しなくてはならない。そこで筆者は暫定的ながら以下のような移入機構の分析モデルを仮説として設定することにした。[12] 図に従って説明することにしよう：

レベルとは移入の段階のことである。Ⅰは外界にあって指示対象になりうる具象物のレベル、Ⅱは具象物の分類意識にしろ抽象概念にしろ、未だ言語記号の体系に組みこまれていない狭義の認識というレベル、Ⅲは意義特徴を束ねた意義素のレベル、Ⅳはそれぞれの意義素に対応する語彙素のレベル、という



うわけである。

そして、どのレベルでアラビズムの干渉があったと考えられるか、によって、表のようなタイプに分けた。各行の上段の±はスペイン語文化圏における存在の有無、下段はアラビア語文化圏による干渉の有無を示してある。大分類のタイプのAはⅠ・Ⅱのレベルでアラビズムの干渉が見られ、それがⅢ・Ⅳにも及ぶ場合、Bは狭義には両文化圏にて認識されていたが、意義特徴の束ね方というレベル（Ⅲ）で

タイプ＼レベル		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
A	A' limón	− +	− +	− +	− +
	A'' azar	− −	− +	− +	− +
	A''' azul	+ −	− +	− +	− +
B	B' balde	− −	+ −	− +	− +
	B'' casa	+ −	+ −	− +	+ −
C	C' aceite	+ −	+ −	+ −	+ +
	C'' alcalde	− −	+ −	+ −	+ +

アラビズムの干渉を受けたもの、そしてCはⅣの語彙素のレベルでの干渉であるので、少なくともアラビズムの移入の時点ではロマンス語系の同（類）義語[13]が存在した場合のものである。そしてそれぞれのタイプを小分類するとA'は具象物・A''は抽象概念・A'''はもともと外界に存在していたものを，認識する

というレベル（Ⅱ）で干渉を受けた場合、そしてB′は新たに組み合わされた意義特徴の束（意義素）がそのままアラビズムの語彙素に結びつけられる場合・B″はその束がスペイン語系の既存の語彙素に結びつけられる場合である。さらにC′は具象概念・C″は抽象概念である。各々の小タイプには具体例が挙げられているが、それについては本稿Ⅲを参照されたい。

いずれにしろ未完成の仮説であるが、基本語彙のなかのアラビズムが新たな事物・概念に関わる割合の大小（タイプAの割合の比率）を確認するという本稿の目的のひとつを果たすには役に立とう。

Ⅲ. 基本語彙のなかのアラビズム

以下に問題のアラビズムを列挙しよう。見出し語は現代語形で、その派生語のなかでは参照した基本語の資料で見出し語になっているものは採用することにした。各語の記述順序は、できるだけ簡略にするため、まず現代語の代表的な語義、初出世紀（前：前半；中：中頃；後：後半）とその時の語形、Corominas による語源アラビア語の転記、そして筆者の判定による移入のタイプ（大分類のA・B・C）を並べ、必要があれば関連事項を付ける（同：移入時の推定同義語）：

1. aceite：「油」－１３中－ záit̂ － C… 同義の古カスティリア語形 olio (‹lat. oleum) はそのまま音声発展すると、「目」ojo (‹lat. oculum) と同音になるため、それを解決するためのアラビズム。

2. aceituna ：「オリーブの実」－１３中－ zait̂una－C － …同 oliva.

3. achacar：「（罪・責任を）負わせる」－１３ － šákà－B.

4. adoquín：「舗石」－１６ －dukkân－B…アラビア語の原義は「石のベンチ」であったが、スペインで舗石の意味を持つ敷石業者の専門用語となる。

5. aduana ：「税関」－１３中 －diwân－B… これに類する制度は存在したはずであるので、意義素のレベルでの干渉であると考えられよう。

6. ahorrar：「節約する」－１３初 (aforrar) －ḥurr－B … このアラビア語は「自由な」を意味し、その意味では１１世紀から forro の形で使われている。aforrar は「（奴隷などを）解放する」を意味したが、後に現代語のような意味になってゆく。[14] 同 librar.

7. ajedrez：「チェス」－１３中 － šiṭráng̃－A.

8. albañil ：「石工・左官」－１３後 (albañí)－bannâ'－B … 類似の職業はあったはずだが、両者を兼ねるというような点で新たな意義素となり、干渉が起こったのではなかろうか。

9. albaricoque ：「あんずの実」－１４前 － birqûq, barqûq－A … このアラビア語自身は出所不明であるが、「ラテン語＞ギリシア語＞アラビア語」の可能性も考えられるという。[15]

10. albóndiga ：「肉だんご」－１５前 － búnduqa－A…新たな概念の料理法であろう。

11. alcachofa ：「朝鮮あざみ」－１５前 (carchofa)－ḥaršûfa－A… 「あざみ」なら cardo (<lat. cardus) があったが、食用ということで新種として移入したのであろう。

12. alcalde ：「市長」－１１中 － qâḍí－C…同 juez.[16] あとで両者は職能分担をしていった。

13. alcantarilla　:「小さな橋」－１３初－qántara－C ... alcántara は puente と同義語として移入したが、地名などにしか残らなかった。その縮小辞形である見出し語は残った。同 puentecillo.

14. alcázar　:「城」－１１後－qaṣr－B... 移入時は城主の住む天守閣を指していた。[17] 認識されていたいくつかの意義特徴が組み合わさった新たな意義素としての干渉であろう。

15. alcoba　:「寝室」－１３後－qúbba－C ... 「円屋根」bóveda, cúpula と同義語的に使われていた（中世）が、１６世紀初頭から記録に現われる近代語の意味の用法はアラビア語自身にもあった。

16. alcohol：「アルコール」－１３後－kuḥúl－A ... 移入時の意味は方鉛鉱のアイシャドー用の粉であった。低ラテン語が現在のような「アルコール」を指すために採用し、再びスペイン語に入った。

17. aldea：「村」－１１前－ḍáiʿa－B ... 行政区分上の意義特徴を含んでいるようだが、[18] 新たな概念というよりも意義特徴の束ね方のレベルでの干渉であろう。あるいは campo, pueblo などとの同義語で移入したのかもしれないが、新たな概念だとは考えにくい。

18. alfiler：「留めピン」－１４－ḫilâl－A.

19. alfombra：「じゅうたん」－１４後－ḫúmra－A ... 「風疹」の意味のほうもアラビズムであるが、こちらは「赤色」ʾáḥmar から。

20. algodón：「綿」－１０中 (algoton)－quṭún－A.

21. alhaja：「宝石」－１２前－hâǧa－B ... 中世には語源的意味である「家具」で使われることも多かった（同 mueble）。ゆえに意義素のレベルでの意義特徴の束ね方で干渉したアラビズムであろう。

22. almacén：「倉庫」－１３前－maḫzén－B ... いくつかの同義語で表現できそうなものを束ねた意義素ではなかろうか。

23. almanaque：「暦」－１５前－manâḫ－C ... 同 calendario の初出は１３世紀末から１４世紀初め。見出し語のほうは長らく専門用語的性格を持っていた。

24. almohada：「まくら」－１５世紀初頭－muḫádda－C ... 同 haceruelo.

25. alquilar：「賃貸し・賃借りする」－１３中－（alquiler の派生語）－C... 同 arrendar.

26. alquiler：「賃貸・賃借（料）」－１３前 (alquilé)－kirâʾ－C ... 同義語と思われる arriendo の初出は１７世紀初頭あたりである。２５番が１３世紀中頃に arrendar と同義語として使われていることを考えれば、別の同義語形があったのかもしれない。いずれにしても新たな概念として移入したものとは考えにくい。

27. alquitrán：「タール」－１３中－qiṭrân－A.

28. arrabal：「郊外」－１２中 (alraval)－rabáḍ－A ... 同義語的な suburbio は大きい町だけを指すが、見出し語はあらゆる大きさの町（村）を指す。[19] しかし suburbio は近代語であって、初出は１７世紀初頭。

29. arroz：「米」－１３－ruzz－A ... この植物の栽培はイベリア半島南東部で７世紀から行われていたがアラビア語文化圏との接触によって一般化した、という説もある。ならば A″′ となろう。

30. ataud：「棺」－１３前－tābût－B... アラビア語は「箱・棺・墓」の意味がある。「棺」の

同義語と思われるものに andas（１３世紀初頭）がある。 cofre（１５初頭）・baúl (16) ・féretro（１７初頭）などは新しすぎて１３世紀ごろの同義語とはなりにくい。いずれにしろ新事物ではなく、意義素レベルの干渉であろう。

31. atún ：「まぐろ」－１４前－tûn－C ... ár. tûn <lat. thŭnnus. 同 toñina（古カスティリア語）< lat. *thŭnnīna.

32. auge：「絶頂」－１３中 ʾaṵğ－A ... 天文学の専門用語として移入した。

33. azafata：「スチュワーデス」－１５後 (açafate)－sáfaṭ－A ... 現代の意味は「女王付きの侍女」から発展している。azafata < azafate（「盆」）の発展は、盆を手にして女王に仕える官女ということで、換喩となろう。１５年後の語形は azafate であり、-ta 形の初出は１６世紀末。-te「盆」はポルトガル語系の bandeja（１７前）に代替された。

34. azafrán：「サフラン」－１３中－za ʿfarân－A ... アラビズムの干渉以前は西欧には知られていなかった植物という指摘[20]もあるのでAにした。同 croco は１８世紀に初出の教養語。しかしギリシャ時代に人気のあった花のひとつであったことから、[21]イベリア半島に既存であった可能性はないのであろうか。

35. azar：「偶然」－１３中－zahr－A ... 移入時は「さいころ遊びの一種」

36. azotea：「平屋根」－１５前－sṵṭáiḥ－A.

37. azúcar：「砂糖」－１３後－ súkkar－A.

38. azul：「青（色）」－１０中－ *lāzûrd－A.

39. balde：de－「無料で」；en－「むだに」－１３前－bâṭil－B ... 同義語形成が可能な gracia（初出１２中）や vano（１３前）が存在したこともあって意義素レベルの干渉となろう。[22]

40. baldosa：「舗石」－１７前－< 'balde'－A.

41. barrio：「地区」－１０中－barr－A ... 移入時は「町に従属する小村」を指した。

42. casa：「家」－１０中－(cf. dār)－B ... 問題は中世カスティリア語で casa が「町」なども意味したことである。アラビア語 dār が「家」と「町」を同時に束ねた意義素に対応していたために、その束ね方の点で干渉を受けた例。

43. cifra：「数字」－１５後－ṣifr－A... このアラビア語の意味でもある「虚空」なら同義語 vacío（初出１２中）があったが、数体系上の概念としては新しく移入した。移入時は「ゼロ」である。現代スペイン語で「ゼロ」を指す cero は、このアラビア語が低ラテン語に入り、イタリア語を経由してスペイン語に移入したもの。[23]

44. chaleco：「チョッキ」－１７前 (jaleco) - ğalīka－A ... トルコ語からアルジェリアのアラビア語を経てスペインに入ったときには「囚人服」を指していた。チョッキ自身は１８世紀後半にフランスから導入され、この語彙素に当てられた。

45. guitarra：「ギター」－１４前－ kitâra－A.

46. halagar：「こびる」－１３前－ḥálaq－B... 意義特徴のそれぞれは既存の概念であるので、その束ね方での干渉であろう。同義語の例として dezir sus palabras de amor が挙げられている。[24]

47. hasta：「まで（前置詞など）」－１０中 (adta)－ḥáttà－B... いくつかの既存の文法機能が一語にまとめられたのであると判断する。[25]

48. he：「（存在指示の副詞）」－１２中 (fe, afé) – hâ – B … これに頼らなくても個々の存在指示は可能であったろう。新たな文法機能を帯びて移入されたなら、意義素レベルの干渉だということになる。

49. jaqueca：「偏頭痛」－１５中 (axaqueca)–šaqîqa – B … 「頭の半分で起こる痛み」は既に認識されていたから意義素レベルの干渉であろう。

50 jarabe：「糖密」－１３後 (xarabe) – šarâb – A.

51. jarra：「（取っ手つきの）壷」１３中 – ǧárra – A.

52. jarro：「（取っ手がひとつの）壷」(jarraよりも口が狭い）－１５前－ (<jarro) – A.

53. joroba：「せむし」－１５前 (adruba) – ḥadúbba, hudûba – C … 同 corcova（初出１５前），giba（１５後）。

54. jinete：「騎手」１４中 (ginete) – zenêtī – A … このアラビア語はもともと、軽騎兵として名高いベルベル族 Zeneta の人を指していた。

55. limón：「レモン」－１５前 – laimûn – A.

56. marfil：「象牙」－９後 (almafil) – ʻaẓm al-fīl (= hueso del elefante) – B … 代表的な意義素干渉の例。

57. naranja：「オレンジ」－１４後 – nāráǧa – A.

58. ojalá：「どうか…であるように」（間投詞）－１５後 – wa šā llâh (= y quiera Dios) – B … 同義語の有無にかかわらず、相応の概念は存在したはずである。

59. quintal：「百単位の重量」－１３後 – qinṭâr – A … 度量衡の単位としては新しい概念。

60. tambor：「太鼓」－１２中 (atamor) – ṭanbûr – A.

61. tarea：「仕事」－１５後 – ṭarîḥa – B – 移入時は「人に課される仕事量」。１３世紀に初出している同一意味分野の３種類の意義素に「一日の仕事量」obra.,「一日の仕事時間」jornada,「苦しみとしての仕事」trabajo がある。

62. taza：「椀」－１３後 – ṭássa – A.

63. zaga：「後部」－１２中 – sâqa – A – 戦術用語として移入。同 retaguardia の初出は１４前 (reguarda).

64. zaguán：「玄関」－１６前 (azaguán) – ʼusṭuwân – A.

65. zanahoria：「にんじん」－１５後 (çahanoria) – safunâriya – C … 同 pastinaca.[27]

Ⅳ. 本稿の目的である検討事項を、Ⅲに挙げたアラビズムについてまとめてみると以下のようになる。

Ⅳ. 1. アラビズムの割合 … 約 5,000 語の基本語彙のなかのアラビズムは６５個であった。この具体的数字は検討の仕方で変化する可能性が大きいが、だいたい１％強という見当はつけられよう。[28]（cf. Ⅰ. 2. ①）

Ⅳ. 2. 抽象概念で情意語となるのは achacar, halagar, ojalá の３語で、やはり少ない。しかし抽象概念に結びつく語彙素なら１９例ほどを数えることができよう（約３分の１弱）（cf. Ⅰ. 2. ②）。

Ⅳ. 3. これらのアラビズムのなかで新たな事物・概念とともに移入したものはどれぐらいになるだ

ろう。筆者がAのタイプに属すると判断したのは３４例で全体の半分強にしかならない。しかしこれとて判定資料の大巾な不足があるので決定的ではないが、基本語彙に関しては、それが大多数であるとは言えない可能性があるように思われる。

Ｖ．結　　び

アラビア語がスペイン語に与えた言語的影響のなかで最大の干渉は語彙面においてであったが、少なくとも現在一般語として目にしたり耳にしたりするスペイン語に関してならば、そのアラビズムさえ極めて小さな割合いしか占めていないことがわかった。

単語のひとつひとつが複雑きわまる歴史を経てきていて、その解明には多方面にわたる膨大な量の知識が要求される。それは筆者の力では到底かなわないことは十分承知のうえで、敢えて本稿を発表することにした。先生方の御教えを仰ぎながら勉強を進めるための手掛りとするつもりである。

京都、３０－Ⅵ－８３

注

1. 本稿は１９８３年５月２１日に大阪大学で開催された日本ロマンス語学会第１９回大会にて口頭発表したもののまとめである。

2. たとえば "... la gran cantidad de los (términos árabes) que subsisten con plena vida, muchos de ellos fundamentales, caracteriza al léxico hispano-portugués frente a los demás romances." (Rafael Lapesa, "Historia de la lengua española", Madrid, 1981, pág. 156.)

3. 林大監修「図説日本語」角川書店、昭和５７年、４１頁、及び波多野完治等監修、「新・日本語講座、 1. 現代日本語の単語と文字」汐文社、１９７８（後者では特に第１章の中野洋「単語の数はどのくらいあるか」と第２章の林四郎「基本語彙はきめられるか」を参考にした）。

4. 口頭発表のときには高橋正武等編「スペイン基本語辞典」白水社、１９８０年を利用した。もとより「基本語彙」の決定に厳密な客観的基準は求め難いとはいえ、筆者には基本的と思えるものが、そこには含まれていないこともあった。調べてみると、この辞典が5,000語の選択にあたって参考にした２点の語彙集のうちの一冊、 Alphonse Juilland et al., "Frequency Diccionary of Spanish Words", Mouton, 1964 は、書き文字を中心にして計量したものであることがわかった。そこで本稿では、話しことばを中心にして4,000語強を選んでいる Luis Márquez Villegas, "Vocabulario del español hablado", Madrid, 1975 のなかからもアラビア語系語を探して、口頭発表時のものに加えることにした。どちらかに出ていれば、それをほぼ5,000語の基本語彙として扱うのである。

5. この数字は Manuel Seco, "Gramática esencial del español", Madrid, 1972, pág.32 に見られる。Kurt Baldinger, "La formación de los dominios linqüísticos en la Península Ibérica", Madrid, 1963, págs. 54-55 によれば、この数字を算出したのは Joseph M. Piel, "Os nomes germânicos" だそうである。派生語のことなどもあって語数の算出方法にユレが出るので、パーセンティジによる表示には問題があると思われる。他方、Rafael Lapesa, íd., pág. 133, nota 5 bis によれば、アラビア語系語であることが確証された単語は約８５０、それらの派生形が約７８０、その異形や語源未確定語の多くがあり、地名では語源の確かなのが約１千、可能性のあるのが約５００ほど存在するそうである。

6. Cf. R. Lapesa, íd., pág. 138 ("En el léxico español de procedencia arábiga escasean paladras referentes al sentimiento, emociones, deseos, vicios y virtudes. La religión cristiana apoyaba los términos lations, y el arabismo, cuando lo hubo, consistió en prestar alguna acepción nueva.")

7. Cf. Arnold Steiger, "Arabismos", en 'Enciclopedia Lingüística Hispánica", tomo II, Madrid, 1976, pág. 108: "No sería demasiado audaz deducir de todo esto que los nombres emigraron al mismo tiempo que las cosas designadas pro ellos, ...".

8. アラビズムの特徴として挙げられている点のなかには、未だ解決されていない問題を含んでいるものもある。詳しくはR. Lapesa の前掲書の第５章を参照されたい。

9. Joan Corominas, "Diccionario crítico etimológico de la lengua castellana", Berna, 1954; "Breve diccionario etimológico de la lengua castellana" Madrid, 1967; y, con José A. Pascual, "Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico", Madrid, 1980 – 81 (A - RE).

10. Cf. R. Lapesa, íd., págs. 155-56; "La suerte de los arabismos hispánicos ha variado según las épocas. Hasta el siglo XI, mientras la Península estuvo orientada hacia Córdoba, se introdujeron sin obstáculo ni competencia. Durante la baja Edad Media continúa pujante la influencia arábiga, aunque lucha ya con el latinismo culto y con el extranjerismo europeo. Después se inicia el retroceso : ... "; y W. J. Entwistle, "The Spanish Language", London, 1965, pág. 134; "This Arabic influence reached its apogee in the tenth century, when the Mozarabic element of the Leonese population was carrying the weight of that kingdom's culture.", etc. そして Lapesa (íd., pág. 156) によれば、他系統の同（類）義語に代替されていったアラビズムには例えば「獣医」：albéitar → veterinario;「床屋」： alfajeme → barbero;「服の仕立て職人」：alfayate → sastre などがある。また Baldinger (íd., pág. 63) によれば、alfayate は１４世紀まで普通に使われたことばだったのに、その後、南仏から新語の sastre が移入すると蔑称となって消えていったし、他方、南仏では tailleur の移入とともに sastre 自身も１９世紀以降、消えていったという。

11. Cf. 本稿注２８.

12. この仮説については、本稿では紙幅に制限があるし、本論の焦点が定まりにくくなるかもしれないので、別稿にて詳述することにした。拙稿「スペイン語語彙のなかのアラビズムに関する移入機構の分析モデル」京都産業大学国際言語科学研究所所報第５巻第２号（１９８４年３月刊行予定）を参照されたい。

13. 厳密な意味では同一の意義素に対応する語彙素はふたつと存在しないだろう。類義語としたいところであるが、その根拠も証明することは不可能に近い。過去のことだからである。そして、ほんの部分的にしか残っていないデータしか利用できない脆弱な基盤に立っているために、このような曖昧な表現をしているのであることをお断りしておく。

14. 検討の対象が動詞である場合、この例からも推測できるように、例外なくロマンス語における派生語なのである。アラビズムの移入時に焦点を当てて検討をすすめるとすると、この種の派生語は対象

外になってしまう。どこまでをアラビズムとするかは困難な判定であるが、とりあえず本稿では不統一な規準のまま、この種の派生語も採用することにした。

15. ラテン語系であるとすれば、その植物自体がラテン語圏に存在していたのか、存在していなかったものに名前だけを借用して命名したのか、またラテン語圏にもともと存在していたとしたらイベリア半島ではどうだったのか、などの疑問が出てくる。そして筆者の力ではどのひとつにも答えることができない。この点についても、雑な推定であるという非難を覚悟のうえで、一応、移入タイプをAとしておく。

16. Cf. R. Menéndez Pidal, "Cantar de Mio Cid", Vol. II, Madrid, 1964, págs.445-447.

17. R. M. Pidal, íd., pág. 443 ("alcaçar").

18. Cf. "Pueblo de corto vecindario y, por lo común, sin jurisdicción propia." del "Diccionario de la lengua española", Real Academia Española, 1970.

19. Cf. S. Gili Gaya, "Diccionario de sinónimos", Barcelona, 1970.

20. R. Lapesa, íd., pág. 134.

21. Cf. Espasa-Calpe, "Enciclopedia Universal Ilustrada Europeo-Americana", Madrid, 1958; L. Guyot et al., "Histoire des fleurs", ed. japonesa, 1965 （「花の歴史」文庫クセジュ）。

22. 同音異義語の balde「水桶」は語源不明。

23. Cf. R. Lapesa, íd., pág. 137, nota 10.

24. E. K. Neuvonen, "Los arabismos del español en el siglo XIII", Helsinki, 1941, pág. 307.

25. スペイン語形のSの出現に関しては重子音 (tt)の異化現象 (Corominas), haciaとの類似化 (W. J. Entwistle, "The Spanish Language", London, 1965, pág.130), 古語の faz (= hacia) か desde による影響 (R. K. Spaulding, "How Spanish Grew", 1965, pág. 61) などの見解がある。

26. Cf. Neuvonen, íd., pág. 243.

27. この語形がカスティリア語文献に記録されているという証言は知らないが、lat. pastinaca 系の pastanaga がカタロニア語に残っていることや北アフリカが原産地であることから同義語として移入したと考える（Cf. 矢頭献一「文学植物記」朝日新聞社、１９７６年、１５頁）。

28. 間接移入のアラビズムには álcali (bajo lat.), asesino(it.), avería(cat.), cero(it.), musulmán(fr), nuca(bajo lat.), tarifa(cat), raqueta(fr.) があり（カッコ内は原語）、未確認のものには azulejo, bata, gabán, gabardina, garra, agarrar, hazaña, tanda, taquilla, zafiro がある。これらをすべて含めても基礎語彙のなかのアラビズムは２％にも達しない。

後記　追加対象語　rincón:「片隅」－14中－ rukún - B..